

広報



IZU
PUBLIC
INFORMATION



6

2018

No.171



HOST VENUE

中学生からお年寄り、地域社会を構成するあらゆる人々と 土肥地区の課題に向き合いながら計画策定を進めてきました。

東日本大震災以降、『津波防災地域づくりに関する法律』が制定され、全国的に津波防災への意識が高まっています。

土肥地区においても、住民主体で組織された「伊豆市海と共に生きる『観光防災まちづくりをみんなで考える会』」は、ワークショップや市民集会、避難訓練などに積極的に取り組んできました。

そして、観光・環境・防災のバランスのとれたまちづくりを進めるため、地域住民、観光業関係者、防災関係の有識者、国、県、市が一体となり『伊豆市「海と共に生きる」観光防災まちづくり推進計画』を策定しました。

今回、区域指定された「海のまち安全創出エリア」は、慎重にかつ丁寧に協議が進められ合意形成に至り、全国初の指定となりました。

これまで実施してきた取り組み

伊豆市津波防災地域づくり推進協議会・伊豆市

2月 第1回協議会
5月 第2回協議会



▲第2回協議会の様子

9月 第3回協議会

11月 地元選任委員との意見交換会
11月 オープンハウス

平成28年

市民の皆さん (伊豆市「海と共に生きる」観光防災まちづくりを みんなで考える会)

3月 講演会
4月 第1回ワークショップ
6月 第1回市民集会
7月 第2・3回ワークショップ



▲ワークショップでは活発な意見交換がされました

10月 第2回市民集会
12月 第1回大市民集会

2月 地区・土肥温泉旅館協同組合意見交換会

3月 宿泊施設連携避難訓練

5月 第3回市民集会
6月 旅館組合情報伝達・確認訓練

9月 土肥中学生と考える会
10月 がんばる地域宣言作成
11月 第4回市民集会
12月 観光施設連携訓練

1月 第2回大市民集会
土肥中学生と考える会



▲土肥中学生からは大人ではないアイデアが！

3月 津波避難訓練
IoT活用避難訓練



▲大市民集会にはたくさんの方が参加

平成30年



▲駿河湾フェリー乗り場で行われた愛称決定観光キャンペーン

3月 区域の愛称決定
「海のまち安全創出エリア」(愛称)
「海のまち安全避難エリア」(愛称) 指定
愛称決定観光キャンペーン

特集

“海と共に生きる” 観光防災まちづくり

美しい海を有する土肥地区は、伊豆有数の温泉地であるとともに、駿河湾の豊かな海産物や美しい夕日など、多くの観光資源に恵まれています。しかし、このような地形や自然環境は災害リスクとの共存を意味しています。

さらに、災害対策だけでなく、人口減少や少子高齢化、観光業をはじめとする産業の維持や地域の暮らしについても考えなければなりません。

安心して暮らせる持続可能で活力のある地域づくりのために「観光防災まちづくり」はスタートしました。

この特集では、地域住民が主体となって積極的に活動し、全国的にも類を見ない土肥地区のこれまでの取り組みについても伝えします。



特別懇談

『全国に誇る土肥の防災意識と地域力』

『伊豆市「海と共に生きる」観光防災まちづくり推進計画」策定に関する取り組みについて、協力いただいた代表の方々と市長との懇談を行いました。振り返っていただきました。集まっていたいたのは、今回の推進協議会会長の東京大学加藤孝明准教授（地域安全システム学を専門）、副会長の静岡大学原田賢治准教授（津波防災を専門、土肥地区住民を代表して西川賢己さん、観光業を代表して勝呂克彦さんです（以下敬称略）。

菊地 本推進計画をはじめ、全国初となる『海のまち安全創出エリア』（津波災害特別警戒区域）の指定（以下『区域指定』という）は、他市町だけでなく国からも大変注目されています。今回、皆さんはどのような考えで取り組んでいたのでしょうか？
勝呂 これまでの防災は、防潮堤の整備など観光には前向きでない内容でしたが、今回

は、観光と防災が共生していくという内容だったので、すごくありがたいと思いました。しかし、心配だったのは『区域指定』の事です。区域の名称と区域指定の内容にギャップがあり、誤解を招いてしまわないか、観光業への影響が出ないかという懸念がありました。
加藤 東日本大震災以降の津波防災は、防災だけに偏りすぎており、総合性に欠けると感じていました。今回の計画は、地域課題を総合的に考え、その中で防災も考えていくという新しい考えです。地域の皆さんと一緒にチャレンジしたいと思い参加しました。
原田 土肥地区は、観光地かつ駿河湾で津波が発生したら到達時間が短いという条件の中で、地域をどのように守っていくのか、真剣に考えなくては行けない。津波対策を総合的に考えていくことを軸として、皆さんと一緒に議論させていただきました。

西川 津波から多くの人が助かるにはどうしたらいいかという議論が必要だと日頃から思っていました。当初は、前向きでない意見が多かったと思いますが、徐々に理解し、「みんなで議論を進めよう」という気持ちに変わっていき

ました。
土肥地区は人口減少、少子高齢化が顕著です。これを少しでも防ぐために大人たちが子どもたちに土肥のことを伝え、防災意識の土台を作っていくことが大事だと考えるようになりました。

土肥の地域力が生んだ津波防災のモデル

菊地 土肥地区の地域力や土地への愛着心を強く感じます。皆さんがここまで議論を進められた原動力はなんだと思いますか？
加藤 今回の議論は予め準備された答えがあるわけではなく、皆で「正解を創り上げて

きた」という感じです。皆でアイデアを出し合ううちに前向きな力が育まれてきました。その過程で、土肥の地域力と私も含めた参加者の力が高まってきました。これは他の地域の模範となる、日本の地域づくりを先導する新しいモデルになったと確信しています。

原田 地域の人が議論して、意味や必要性を理解するというのがプロセスを踏めたことが大きかったと思います。行政だけで推進計画の策定はできませんが、それでは意味を成さなかったと思います。区域指定は、一つの手段ではありませんが、全国的に先進的な事例であり胸をはれることだと思います。

西川 計画を検討する中で、初の試みとして夜間避難訓練を実施しました。想定以上の人が参加し、お互いに声を掛け合い、ここは暗いから危ないというような発見がありました。子どもたちからもユニ

ークな提案があり、今では、他の地区にも訓練の輪が広がりました。地区同士の意見交換も増え、どんどん発展しています。これは、先生方が熱心に教えてくれたからだと思っています。

防災意識を日常から取り入れる

西川 日頃から、防災意識を高くもつこと、地域での挨拶や会話をすることで、いざというときの声掛けが自然にできると思っているので、積極的に取り組んでいきたいと思っています。そして、避難経路の確認も大事です。気になることがあれば、みんなと相談して解決していきたいです。

勝呂 土肥の宿泊施設は、津波避難ビルに指定されているので、住民や宿泊者、そして通行人も安全に避難できるような場所にしていきたいです。避難だけでなく、観光客の皆さんが、安全に自宅へ帰

れることまで考えていかなければならないと思っています。

原田 私は、防災はインフラの一つと考えています。社会が成り立つために安全性を確保できる地域の機能が防災です。観光ができる地域の安全性をどう担保するのが時間をかけて検討していく観点が必要だと思います。

加藤 内発的な市民の取り組みが持続する状況を根付かせることが当面の目標です。それには行政の支援が不可欠です。伊豆市には、全国を先導するトップランナーとして、国とともに積極的に意見交換を重ね、土肥に必要なものを新しい支援策を創ることを期待しています。

一方で、土肥の人口減少は深刻です。次のステップとして、防災を考えながら、同時に明るい将来像を描くことを考えていきたいと思います。

地元に戻ってきたくなる環境づくり

菊地 土肥では二地域居住（※）のしくみが生まれつつあります。土肥の良さを生かし、土肥を元気にしていくということも合わせて考えていきたいですね。

（※）都会に暮らす人が農山漁村などの地域と同時に生産拠をもつこと。

平成29年4月、郡内企業が小土肥にコワーキングスペースをオープンしました。

西川 移住される人には、良いところだけでなく、災害も起きうるという中で一緒に声を掛け合い、自然に頑張っていけたらと思います。

勝呂 観光・旅館業界でも人手不足が深刻で、地元出身者が従事している人は少ない状況です。理想としては、土肥に生まれ育った人が、地元に戻ってきて働いてもらいたいと思っていますが、仕事の魅力が創生できていないと痛感しています。地元に戻ってきたくなるような環境づくりを

していきたいです。
菊地 伊豆市の観光業において、宿泊客数は確実に回復していると感じています。今後、企業の事務所の誘致などを進めることで、伊豆市に滞在する人口を増やすことができるのではないかと考えています。

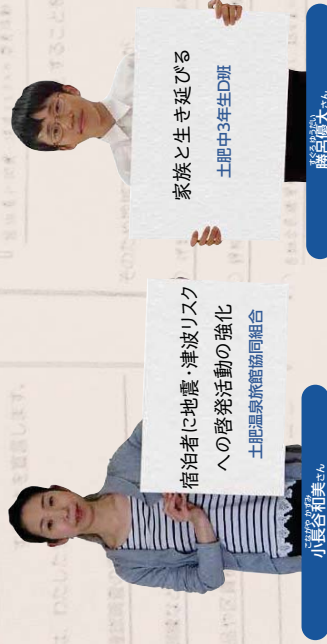
訪れた人に伊豆市を好きになってもらうことが鍵です。これからも土肥地区の観光、防災そして地域力を高めていただけるよう、皆さんのご協力をお願いします。



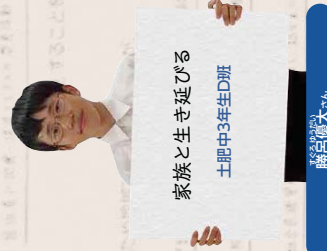
自分たちに がんばる 地域宣言

できること 土肥地区の 19団体が 掲げた

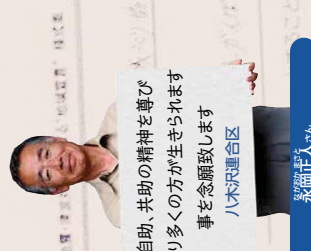
地震・ 津波対策



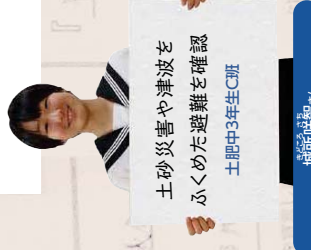
小長谷利美さん
土肥温泉旅館協同組合



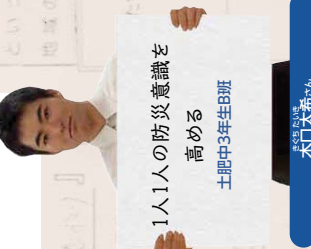
勝宮健太さん
土肥中3年生D班



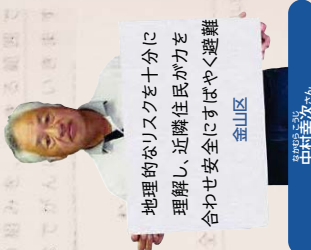
永崎正人さん
八木沢連合区



城所俊智さん
土肥中3年生C班



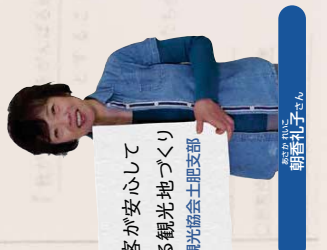
木口太希さん
土肥中3年生B班



中村幸次さん
金山区



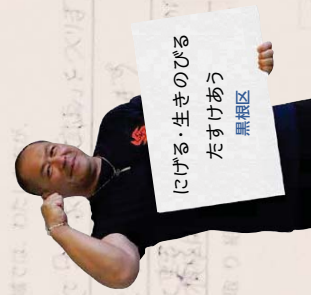
野毛美南さん
土肥中3年生A班



朝香礼子さん
伊豆市観光協会土肥支部



勝呂健一さん
土肥・小土肥地域づくり協議会



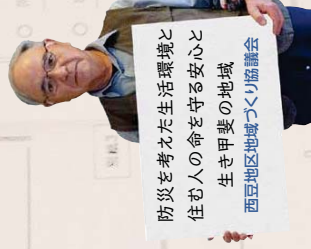
西川健一さん
黒根区



鈴木修司さん
平野区



小野澤一彦さん
西浜区



黒田健祐さん
西豆地区地域づくり協議会



勝谷和史さん
浜区



鈴木直一さん
馬場区



吉崎敏光さん
松原区



山口裕博さん
大藪区



伊藤大輔さん
伊豆漁協土肥支所

がんばる地域宣言とは

地域主体で行なう取り組みの一つとして、地域を構成する皆さんに、災害への心構えや備え、避難や支援のあり方・方法を『がんばる地域宣言』として作成し、自らの目標として掲げていただきました。

地域の皆さんには掲げた取り組みを進めていただき、地域だけで実施することが困難なことについては、行政と積極的に連携を図り、地域先行・行政後追いによる方法で取り組みが推進されます。

今後は、この地域宣言を基に、地域で取り組む(共助)を实践する計画である『地区防災計画』として位置付けたりすることも検討していきます。

※『がんばる地域宣言』は平成29年10月に作成いただきました。団体名は当時の名称で掲載しています。

国土交通省も静岡県も、ともに考えていきます

協議会の道すがら、寒風にピンクの花弁を揺らす早咲きの土肥桜が大変印象的でした。将来起こりうる最大クラスの津波から「なんとしても人命を守る」ため全国で防災・減災の取組が進められる中、伊豆市も観光等の振興や活力の持続性を考えた推進計画、「海のまち安全創出エリア」指定や実践的な避難訓練等、地域の皆様の参加も得てアイデアを活かした先進的な取組が進んでいます。他の地域を牽引するモデルとして期待を寄せつつ、観光・防災の調和のとれた魅力あるまちの実現に向け、市や県など関係機関とも連携しながら後押しして参ります。



国土交通省 総合政策局
参事官(国土政策担当) 山岡 四郎
伊豆市 市長 山岡 四郎



静岡県交通振興部
河川砂防河川整備課
課長 山岡 四郎



先駆者として、地域が一体となった観光防災まちづくりを目指す

平成30年3月、「伊豆市・海と共に生きる」観光防災まちづくりをみんなで考える会」は、「ジャパン・レジャーエス・アワード(強朝化大賞)2018」で最高賞であるグランプリに輝きました。この賞は、強くてしなやかな地域づくりのために活動・開発などを実施している全国の企業や団体を評価・表彰するものです。今回の取組みに対する住民の姿勢や地域全体での零開きづくり、さらには「が

んばる地域宣言」の作成など地域主体の取組が評価され、受賞となりました。今回「全国初の指定となった『海のまち安全創出エリア』県内で3市町目の指定となった『海のまち安全避難エリア』の指定は、土肥地域の将来を見据えた観光防災まちづくりを進めるための取組の一つです。市では、これからも観光防災まちづくりの先駆者として、「地域主体による具体的な取組推進」と「土

肥地域の観光防災まちづくりを正しく知って・理解していただくための取組」を念頭に、引き続き地域と連携し、国や県の協力をいただきながら、推進計画に示された地域住民のアイデアの具体化に向け検討を行なっていきます。今年度は、観光情報と防災情報を一体として発信できるアプリの導入や、観光施設と避難施設を兼ねた施設整備の検討も始めています。推進計画についても、定期的に進捗状況を評価・検証・見直しを行ない、地域が一体となった『観光・環境・防災のバランスがとれた海と共に生きる、まちづくり』の実現を目指していきます。

問合せ 防災安全課
05558(2) 9867
観光所協力/
明治館、旅館おや

区域愛称

『海のまち安全創出エリア』 『海のまち安全避難エリア』に込められた思い

3月27日(火)、土肥地区は全国初の津波災害特別警戒区域(オしんじーん)と津波災害警戒区域(イエローゾーン)の指定を受けました。

今回の区域指定のきっかけは『津波浸水区域内は、津波災害のリスクがあることを認識して生活する必要がある』『高齢者や子どもたちがスムーズに安全な場所に避難できるような対策が必要』などの住民の意見でした。これらの意見は、区域指定の目的や考え方と同じだったのです。

しかし議論の中で、全国初の指定であることや区域名称で誤ったイメージをもたれるのではないかと、住民も減ってしまうのではないかなど、土肥内外への影響

を心配する声も多くありました。さまざまな意見がある中、慎重にかつ丁寧に議論が進められ、住民の理解が進み、指定を受けることになったのです。そして、地

域の安全を高めるための意匠をもつ区域指定を正しく理解してもらうため、愛称をつけることとなり、公募。投票を経て区域の愛称が誕生しました。

海のまち安全創出エリア (津波災害特別警戒区域の愛称)

【区域の意味】最大クラスの津波が発生した場合でも「人命を守る」ため、津波から避難することが困難な要配慮者が使用する施設や地蔵や津波に対して安全なものとし、津波を避けることができるように強化する区域

【愛称に込めた思い】

地震・津波からの避難が難しい高齢者や乳幼児などが、津波を「避けて」助かるように、安全にするための取り組みを作り出し、積み重ねていくエリアに！

海のまち安全避難エリア (津波災害警戒区域の愛称)

【区域の意味】最大クラスの津波が発生した場合でも「人命を守る」ため、いざというときに津波から逃げることでできるような津波避難体制などのソフト対策を強化する区域

【愛称に込めた思い】

方が一地震・津波による災害が起こった場合でも安全に「逃げる」ことができよう、取り組みをみんなで行っていくエリアに！

始まっています！ 安心・安全な観光地づくり

宿泊・観光施設と連携した避難訓練

土肥地域では、津波からの緊急避難場所として順建て以上の宿泊施設と津波避難どル協定が結ばれています。宿泊施設と連携した避難訓練では、静岡大学の学生や県職員も参加し、土地勘のない人でも迅速に避難できるかの確認や、津波避難ビルの宿泊施設では適切な誘導ができるかの確認をしました。この訓練の様子は、静岡大学の協力により、ドローンで上空からの撮影も行なわれ、避難者の動向分析や広報写真などに活用されています。

観光施設の『土肥金山』では、避難誘導訓練を行ない、従業員が坑道や展示場などから参加者を誘導し、施設内の避難路から高台へ避難をしました。高台にはいざという

きに観光客や地域住民が使用できるように備蓄倉庫が設置され、避難路には隣接する市指定避難所へ直接行けるように工夫が施されています。



▲坑道から避難する参加者

通信機器や避難誘導標識の整備

土肥温泉旅館協同組合と協力し、津波避難ビルに指定されている宿泊施設と土肥支所が通信できるように無線機を配備しました。

また、夜間に発光する避難誘導標識や海水浴場からの避難誘導標識、避難路にはソーラー照明の設置が進んでいます。